



▲何度も整形し、茶碗を作った



▲浅田さん(左)の指導を受ける部員たち



▲浅田さんのアトリエで粘土作りを行った



▲切り出した状態の土は根や小石が付着している



▲カッターナイフの先で根や小石を取り除く作業は、100時間を超えた



▲素焼きした茶碗(右)に塗る釉薬(左上)を、藤の木の灰などから作成



◀◀釉薬を塗り、仕上げを行った



▲本焼きを終えて完成した茶碗の中には、曲がったり割れたりしたものもあった



▲本焼きは、1220～1300度で3日間焼き続けた

◀完成を祝い、浅田さんとともに記念撮影する部員たち
▼完成した茶碗で、心のこもった茶を点てた



自然そのままを受け入れて
茶道の精神の一つに、――碗いわんのお茶を通じてお互いの心分かち合い、相手に対して最善を尽くすこと――があるという。部員たちは、自分たちが心を込めて作った茶碗で点てるお茶こそがこれに通じると考え、昨年9月、久美浜町に住む陶芸家、浅田尚道さんを訪ねた。「自然をそのまま受け入れて、それによって向き合うか。一つ一つ考えながら創作してほしい」と浅田さん。14人の陶芸活動が始まった。

全てが手作業

茶碗作りは、全て手作業。木の根や小石が混じる久美浜の土から、茶碗作成に適した土を選別。一碗分の土2キログラムを用意するのに、50時間を費やした。しかも、陶芸用の粘

自然そのままを受け入れて

3月12日、久美浜高校で同校茶道部員14人が作った茶碗が披露された。「一番大切な人にお茶を点てたい」と一心で作成したものだ。「全て手作業で行うこと」「久美浜産であること」にこだわり、7カ月間に及び創作活動の末に完成させた。

土とは違い、自然のままの粘土は粒子がいびつなため形づくりが難しく、火にも弱い。そのため、部員たちは何度も土を練り直して整形した。

仕上げとなる釉薬も、校内にある葡萄や藤の木の灰から作って色づけた。

ものづくりの感動、喜び、感謝学ぶ

本焼きを終えた今年3月、部員たちは自作の茶碗と対面した。曲がった器、割れた器もあった。しかし、部員たちにとっては、一つ一つが「言葉で言い表せないほど大切な一品」となった。部長の奥田亜希さんは、「ものづくりを通じて感動、喜び、感謝を学んだ。この心をかみしめて茶を点てたい」と話した。部員たちは、それぞれの一番大切な人へ、思いの詰まった一碗で茶を点てた。

思いをひとつの形に

久美浜高校茶道部
茶碗作り

自作の茶碗で茶を点てる茶道部員